

筑後国府跡

(立石土塁)

—第272次発掘調査報告書—



**The Governmental Office
of
Chikugo Province**

— Report of 272th Survey at Tateishi Area —

平成26年(2014)3月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。市内には先人達の残した文化遺産が数多く残り、その究明が進められております。

今回の調査は、古代の筑後国の中心であった筑後国府跡で実施しました。長らく中世居館の跡と予想されてきた土塁を初めて発掘調査し、その構造や年代に迫ることができました。また、周辺で発見された古代の遺構に関連する溝を発見し、古代における土地利用の一端を発見しました。この発掘調査の成果が、地域史解明や文化財保護に対する市民の理解に貢献できれば幸いです。

なお、今回の発掘調査に際して、土地所有者の■■■■氏をはじめ、近隣住民の皆様にご多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成26年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正則

例言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成25年度に■■■■氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第272次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 遺構実測図の作成は西と大宅和弘、田中樹子、塚本明美、橋原初美、藤木幸子、船越朝菜、丸山幸、渡辺しげ子が行い、浄書は当課専任非常勤職員の丸山裕見子が行った。遺物実測図は丸山裕見子が作成し、浄書も行った。遺物観察表は、西と丸山裕見子の観察を元に西が作成した。
4. 遺構写真はマミヤRB67を用いて西が撮影した。遺物写真はニコンD700デジタルカメラを用いて、当課の江島伸彦と江頭俊介、西が撮影した。なお、本文と実測図と観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標値は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基に作成した。
6. 本書で使用した遺構番号のうち、溝状遺構S D1251・1258は第30次調査の番号を踏襲した。
7. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号はT K H-272、調査番号は201304である。
9. 本書の編集は西が行った。
10. 表紙図版は、草刈り後に南西側から撮影した、土塁の全景である。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	17

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成25年2月25日、土地所有者から、久留米市合川町386-1他における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内であり、南側では昭和54年度に確認調査を実施し、堀状の溝を検出している（第30次調査）。また、「立石土塁」の通称がある方形館の土塁が残る場所でもあり、平成16年度には現況測量を実施している（第197次調査）。さらに、確認調査でも遺構を検出したため、2月27日に発掘調査が必要である旨を回答した。4月15日、土地所有者から「発掘調査の依頼」が提出されたため、土地所有者と久留米市長権原利則は、4月24日付で筑後国府跡第272次調査の委託契約を取り交わした。ただし土塁に関しては、建物基礎が及ばず、破壊が免れる箇所についても、市単費事業として測量や一部掘削による調査を行った。現地での発掘調査は5月7日から7月6日まで実施した。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会	教育長：堤 正則
調査総括：市民文化部	部長：野田 秀樹
	次長：佐藤 光義
文化財保護課	課長：園井 正隆
	課長補佐兼課主査：宮崎 俊一・白木 守
	事務主査：塚本 映子
	庶務担当：豊福 早苗
	調査担当：西 拓巳
	整理担当：古賀 和子・丸山裕見子

発掘調査臨時職員

大宅 和弘、古賀 守、執行 弘子、高尾 春代、田中 樹子、塚本 明美、永尾 忍
 永富 敏明、権原 初美、中村 麻衣、中村万喜雄、野口 忠勝、藤木 幸子、船越 朝菜
 丸山 幸、迎 直樹、由布 幸子、渡辺しげ子、渡辺やつ子（五十音順）

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、土塁の残存状況と、その周辺に残る遺構の把握を目的に実施した。なお、共同住宅の計画上、調査区は南北で2地点に分けた。平成25年5月7日、対象地の草刈りを開始し、5月9日から作業員を投入して土塁の現況測量を実施した。5月16日、重機で調査区の表土を剥いだ後に遺構検出を行い、北区の遺構掘り下げを始めた。北区遺構と南区の土塁盛土の測量・写真撮影などの記録を実施する間、土塁東辺の中央部にトレンチを設定。盛土を測量・撮影した上で掘削し、

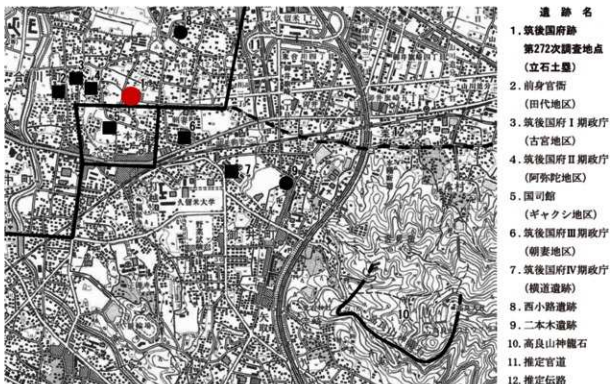
土塁の土層と下部遺構を検出して記録した。6月4日、北区全体を撮影後、重機による埋め戻しを開始。6月5日には高所作業車を用いて土塁全体と南区の土塁盛土を撮影して、南区土塁の掘削を始める。6月6日に北区の埋め戻しを完了させて、南区の遺構検出に着手した。梅雨に入中、南区の遺構を順次掘り下げて記録し、7月2日に高所作業車で南区全体を撮影。7月5日まで一部遺構の掘り下げと測量を続け、翌7月6日に機材を撤収して、発掘調査を終えた。

遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くんCubic」で編集・保存した。ただし、土層は手測り（1/10）で記録した。記録写真は、モノクロ・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

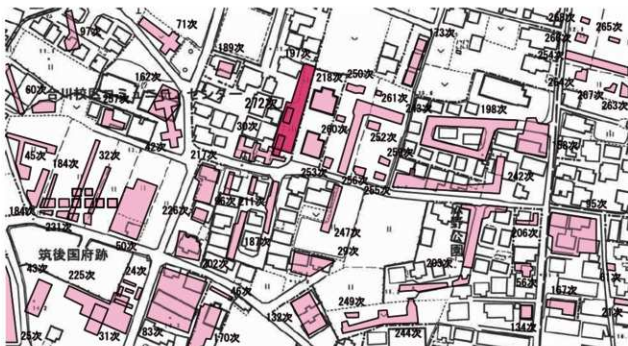
II. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部、筑後川の中流域に位置する。久留米市の南東部には、耳納山地が東西に連なり、その西端には高良山（標高312.3m）や吉見岳（標高147.5m）が聳える。耳納山地から北西に派生する低台地の北部、西側を高良川、東側を井田川、南側を断層崖で区切られた一帯に、筑後国府跡の国府城がある。第272次調査地点はそのほぼ中央、標高約13mに位置する。

国府城における最古の官衙遺構は、7世紀中頃に高良川右岸の田代地区を中心に造営される。高良川に面して、溝や土塁で遮られた区域に建物群を配置する。防衛的な配置から、軍事的役割を担った「前身官衙」と考えられ、7世紀中頃に築造された高良山神籠石との関係が窺える。7世紀末には筑前・筑後の2国が成立するが、ほぼ同時期に南北約180mの築地塀で囲繞された官衙的な建物群が古宮地区に営まれる（Ⅰ期政庁）。この政庁は8世紀中頃に阿弥陀地区へ移転する（Ⅱ期政庁）。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形 (1/2,500)

Ⅱ期政庁も築地塼で区画されるが、9世紀前半になると南北75m・東西67.5mに礎石を有する建物群が現れ、大量の瓦が出土する。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東側のギャクシ地区付近には、国司館と推定される区画があり、周辺には政庁に付属すると思われる官衙群が分布する。Ⅱ期政庁は10世紀中頃に焼亡するが、その原因を藤原純友の乱（承平・天慶の乱）による兵火とする説もある。焼亡した政庁は、約600m東の朝妻地区へ移転する（Ⅲ期政庁）。南北141m・東西137mの区画内に、正殿や東西脇殿に相当する大型掘立柱建物が営まれる。政庁東側には、中世末に書かれた『高良玉垂宮神秘書（高良記）』にある「在国司居屋敷」とみられる遺構が位置する。

ここまで、政庁は官道付近の低台地上を東へ移るが、『高良記』には朝妻北方の「初メノ符」が延久5年（1074）に「今ノ符」へ移転したという記述がある。断崖上の横道遺跡では、11世紀末に掘立柱建物群が現れるが、これこそ「今ノ符」の政庁と予想されている（Ⅳ期政庁）。横道遺跡の建物群は12世紀後半まで存続する。その他、段丘上には二本木遺跡に集落が形成される。一方の段丘下では、西小路遺跡で10～11世紀の掘立柱建物群や、一辺100mの方形に回る中世の溝が検出されており、古代末以降の方形館があったことが示唆される。

字名である「立石」は、『高良記』に記された高良宮大祝の衣服田に「タテイシ（立石）一丁」とあるのが初出である。本調査地点に位置する通称「立石土塁」は、元々一辺一町（約109m）の方形に廻る土塁で、第30・40・162次調査で検出された外堀SD1251（162SD30）の規模も、これを裏付ける。だが、約40年前までは南東部を残すだけとなり、この状態で今日まで残った。立石土塁の存在は古くから知られており、久留米藩士の矢野一貞は嘉永6年（1853）に著した『筑後将士軍談』で、国司の官舎跡と推測している。古賀壽氏は、土塁が御井郡条里と一致することを指摘し、字図の検討から一辺一町の方形土塁と推測して、国府衰退後の初期方形館跡と予想している（註）。

（註）古賀壽 1976年「中世の筑後国衙」 久留米郷土研究会『久留米郷土研究会誌』第5号

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序

本調査地点の現況は雑草が茂る空地だが、平成16年（2004）頃まで「長者屋敷」「長者の藪」と呼ばれる雑木林があった。土塁は対象地の東側と南側に位置し、その周辺の地表は土塁からの流土が覆う。この流土をはじめ、土塁上の表土にも建材やビニールハウスの廃材が多数含まれていた。

北区の表土は黄褐色粘質土で、地表下0.2mを覆う。下層には、明オリブ色粘質土が0.15～0.2m堆積し、その直下にある地表下0.4mの地山面で遺構を検出した。

南区は、水田として用いられていた南側を除けば、地表下0.15mを土塁からの流土が覆い、下層に暗褐色粘質土が0.25m堆積する。攪乱や近世の廃棄土坑の存在から、この土層が本来の表土だと思われる。この下に明オリブ色粘質土を挟んでオリブ灰色粘質土が0.3m堆積するが、土塁裾の溝状遺構SD86の先端が見られる。

地山面は、土塁積土下では標高12.5m、そのほかの場所では標高12mで、これらの地山面で遺構を検出した。地山は、標高11.7mより上層は灰オリブ色粘質土、下層は明黄褐色粘質土である。

2. 検出遺構

遺構密度は高く、古代の溝状遺構8条、中世の溝状遺構3条、土坑2基、近世の溝状遺構2条、その他ビット多数を検出した。遺構の密度は高いが、南区は後世の攪乱が目立つ。以下、主な遺構について北区・南区・土塁に分けて述べる。

北区の調査

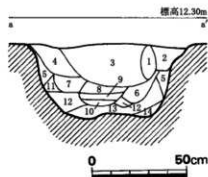
溝状遺構

SD16（第3～5、7図）

調査区北側で検出した、両端が調査区外に及ぶ遺構である。長さ6.2m以上、最大幅1.1mを測り、深さは最大で0.55mである。東側は土塁の下を走る。埋土は、黄褐色と暗褐色を主とした粘質土で、地山ブロックを含む。遺物は、土師器の坏蓋、ヘラ切り底の坏、高坏の脚部、縄目を有する平瓦、7世紀代の須恵器坏身、黒色土器B類の破片が出土した。土師器の坏はいずれもヘラ切り底であることから、土塁築造前の古代に属すると思われる。

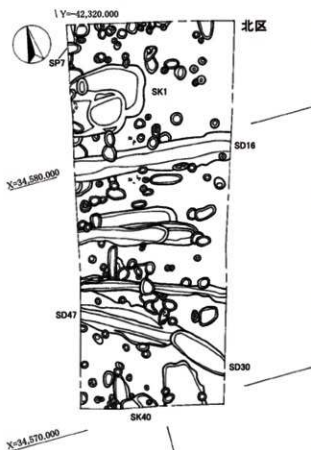
SD30（第4～5図）

調査区南東部で検出した溝である。東側は調査区外へ及ぶ。長さ2.6m以上、幅0.9mで、深さは最大で1mである。埋土は褐色粘質土である。遺物は、土師器の坏や甕が出土した。いずれも細片だが、坏は9世紀以降の特徴を有することから、SD16と同様に古代の遺構と思われる。

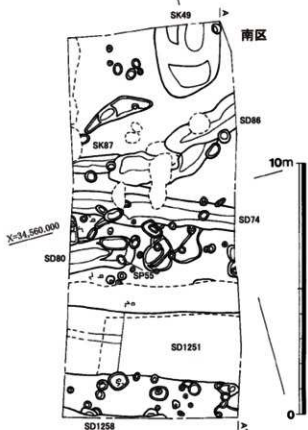


1. 明黄褐色砂質土。砂利含む（縦横風か）
2. 暗褐色粘質土。地山ブロックを含む
3. 黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
4. 暗褐色粘質土。地山ブロック・段紋を含む
5. 明黄褐色粘質土（地山所被覆）
6. 黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
7. 暗褐色粘質土。地山ブロック・段紋を含む
8. 暗黄褐色粘質土。地山ブロック・黒褐色ブロックを含む
9. 暗黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
10. 黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
11. 黄褐色粘質土。地山ブロック・黒褐色ブロックを含む
12. 明黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
13. 明黄褐色粘質土。地山ブロック・黒褐色ブロックを含む
14. 暗褐色粘質土。地山ブロックを若干含む

第3図 SD16土層図（1/20）



第5図 北区全景（南西から）



第6図 南区全景（北西から）



第7図 S16完掘状況（東から）

第4図 筑後国府跡第272次調査遺構配置図 (1/150)

SD47 (第4～5図)

北区南側で検出した溝である。西側は調査区外へ延び、東端はSD30が後出する。長さ4.3m以上、最大幅1.5m、深さは最大で0.4mを測る。掘方は二段になっており、深さ0.2m前後に段がある。埋土は褐色粘質土であった。遺物は細片ばかりだが、土師器の坏身や甕、鉢、須恵器の甕片、陶器片、古瓦(縄目)が出土した。坏身はヘラ切り底や高台を有する物ばかりで、一部は被熱している。

土坑

SK1 (第8～9図)

調査区北西壁際で検出した、不整形の土坑である。調査区西側へ延びるが、東西長3.2m以上、南北長2.7m、深さ0.5mを測る。埋土は暗褐色粘質土が主である。出土遺物のほとんどが土師器で、大半が糸切り底の坏だが、土鍋や托、坏蓋、もあった。この他に、須恵器の瓶、古瓦、さらに羽口の破片が出土した。

SK40 (第4～5図)

調査区南辺で検出した。検出したのは一部だが、東西長1.4m以上、南北長0.5m以上、深さ0.25mを測る。出土遺物は僅かだが、中世の土師器土鍋の口縁が出土した。

ピット

SP7 (第4～5図)

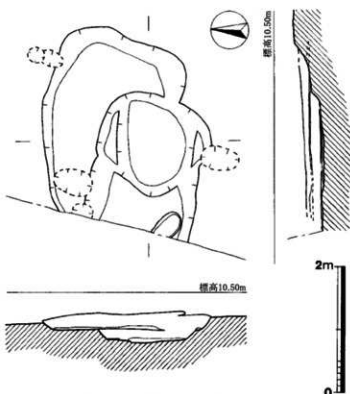
調査区北東隅で検出したピットである。調査区外へ延びるが、長径0.5m以上、短径0.25m以上、深さ0.3mを測る。遺物は土師器の細片の他に、12世紀後半の龍泉窯系青磁碗が出土した。

南区の調査

溝状遺構

SD74 (第4、6、10、17図)

南区の中央を横切る溝である。東西端は調査区外へ延びるが、土層の状況から、土塁に先行する



第8図 SK1実測図 (1/60)



第9図 SK1完掘状況(東から)



第10図 SD74完掘状況（北西から）

のは確実である。長さ6.6m以上、最大幅1.3m、深さ0.4mを測る。埋土は、暗褐色や黒褐色、暗オリーブ色からなる粘質土で、地山ブロックを含む。遺物は、土師器の坏や甕、土鍋の細片が大半だが、ほかに須恵器の壺の破片、さらに白磁の玉縁碗が出土した。出土遺物の年代から、12世紀後半以降に埋没したと思われる。

SD80（第4、6、11～12図）

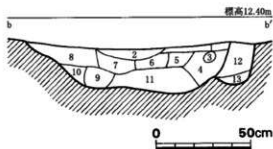
南区中央部西壁で検出した、西端が調査区外へ延びる溝である。長さ2.6m以上、幅1.2m、深さは最大で0.45mを測る。SP55をはじめ、複数のピットと重複関係にある。埋土は、暗褐色や灰褐色、褐色が主の粘質土で、土器片や炭化物を多く含む。出土遺物は多く、土師器の坏や甕の他に、8世紀代の須恵器碗の底部、9世紀末～10世紀にかけての黒色土器碗、灰釉陶器の壺、縄目を有する平瓦、炭化材などが出土した。出土遺物の年代から、8世紀から10世紀にかけて存続した溝と思われる。

SD86（第4、6図）

南区北東部で検出した溝である。東側は調査区外へ延びるが、土層観察から土層の内側に接する溝と推測される。長さ3.3m以上、幅1.1m、深さは最大で0.6mを測る。上部に近世から昭和初期にかけての攪乱が掘り込まれるが、埋土は主に褐色とオリーブ色の粘質土で、土層積土の流土と思われる。出土遺物は、ヘラ切りを有する土師器坏や黒色土器A類の碗、須恵器の甕、古瓦などがあるが、細片ばかりで、しかも寛永通宝などの近世以降の遺物も混入していた。

SD1251（第4、6、13～14図）

南区南側で検出した溝である。作業工程上、第30次調査の埋戻しを含む長さ2m部分のみ掘削し



1. 灰褐色粘質土。黒褐色ブロックを含む
2. 暗褐色粘質土。灰褐色ブロック・ブロック状の炭を含む
3. 暗褐色粘質土。灰褐色粘質土を含む（樹根痕）
4. 暗褐色粘質土。炭粒・土器片を含む
5. 暗褐色粘質土。灰褐色ブロック・炭粒・土器片を含む
6. 明黄褐色砂質土。暗褐色ブロックを含む
7. 褐色粘質土。暗褐色ブロック・土器片を含む
8. 褐色粘質土。灰褐色ブロック・地山ブロックを含む
9. 褐色粘質土。地山ブロック・土器片を含む
10. 暗褐色粘質土。地山ブロックを多く含む
11. 暗褐色粘質土。地山ブロックを含む
12. 灰褐色粘質土。明黄褐色ブロック旋じる（ピット埋土）
13. 暗褐色粘質土（ピット埋土）

第11図 SD80断面土層図（1/20）



第12図 SD80完掘状況（東から）

南区北東部で検出した溝である。東側は調査区外へ延びるが、土層観察から土層の内側に接する溝と推測される。長さ3.3m以上、幅1.1m、深さは最大で0.6mを測る。上部に近世から昭和初期にかけての攪乱が掘り込まれるが、埋土は主に褐色とオリーブ色の粘質土で、土層積土の流土と思われる。出土遺物は、ヘラ切りを有する土師器坏や黒色土器A類の碗、須恵器の甕、古瓦などがあるが、細片ばかりで、しかも寛永通宝などの近世以降の遺物も混入していた。

た。東西部分は調査区外へ及ぶが、長さは6.8m以上に及ぶ。北側の先端は、撓乱で削平されているが、残存幅2.3m、深さ1.4mを測る。埋土は粘質土が中心で、中央部はオリーブ色系だが、下層や壁面では褐色系が主で焼土や炭化物を含む。土層の状況から、少なくとも1度掘り直されている様子が窺える。出土遺物は土師器、須恵器の甕などがあるが、細片ばかりで量も少ない。

SD1258 (第4図)

南区南壁にかかる、第30次調査でも検出された溝である。大部分が調査区外に延び、長さ4.2m、最大幅0.4m、深さ0.15mのみ検出した。埋土は第30次調査で埋め戻した際の土で、遺物は無い。

土坑

SK49 (第4、6図)

南区北端で検出した、楕円形気味の土坑である。北側は調査区外へ延びる。南北長3m以上、東西幅2.6m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が黒色土、下層が褐色土である。遺物は、土師器の坏や甕、古瓦が出土し、黒色土器の高台部が出土したことから、遺構の年代は10世紀後半～12世紀と思われる。また、釘または鐵の茎と思われる鉄製品が、曲がった状態で出土した。

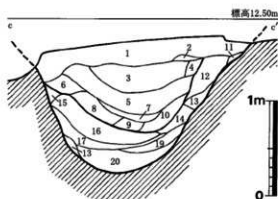
SK87 (第4、6図)

南区中央部で検出した不整形の土坑である。東西長2.3m、南北幅1.3m、深さ0.4mを測る。遺物は土師器の細片や古瓦のほかに、17世紀前半の陶器皿が出土した。近世初頭に土塁の裾に掘られた廃棄土坑だと思われる。

ピット

SP55 (第4、6図)

南区中央で検出したピットである。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は褐色で、SD80に比べて明るい。遺物は、緑釉陶器の壺か甕の肩部と思われる破片と、土師器の高台付碗が出土した。遺物や先行するSD80の年代から、10世紀以降に埋没したと思われる。



1. 暗黄褐色粘質土。炭粒・土師片を含む
2. 暗褐色粘質土。
3. 黒オリーブ色粘質土。明オリーブ色ブロックを含む(土層横士の流れ込みか)
4. 黒オリーブ色粘質土。地山ブロックを含む
5. 暗オリーブ色粘質土。地山ブロックを若干含む
6. 明オリーブ色粘質土。明黄褐色ブロック・地山ブロックを含む
7. 暗オリーブ色粘質土。焼土粒を含む
8. 明オリーブ色粘質土。地山ブロックを含む
9. 暗褐色粘質土。焼土塊・炭粒を含む
10. 暗オリーブ色粘質土。焼土粒・炭粒を含む
11. 明黄褐色粘質土(地山再堆積)
12. 暗黄褐色粘質土。
13. 明黄褐色砂質土。暗褐色ブロックを含む(地山再堆積か)
14. 暗褐色粘質土。明黄褐色砂質土を含む
15. 暗オリーブ色粘質土。地山ブロックを若干含む
16. 暗褐色粘質土。地山ブロックを若干含む
17. 灰褐色粘質土。明黄褐色砂質土を含む
18. 黄褐色砂質土。
19. 暗黄褐色粘質土。地山ブロックを含む
20. 黄褐色粘質土。焼・焼土粒・炭粒を含む

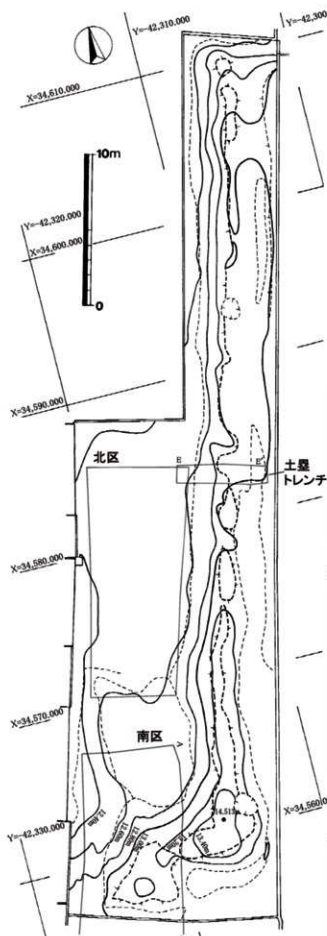
第13図 SD1251断面土層図 (1/40)



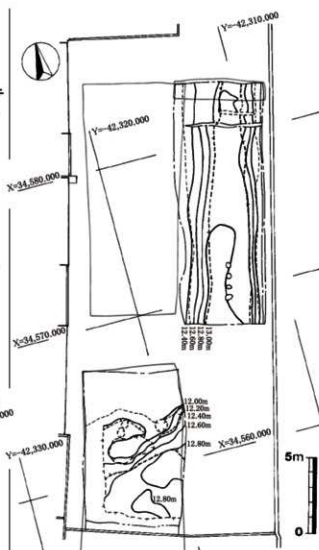
第14図 SD1251土層断面 (西から)

土塁の調査

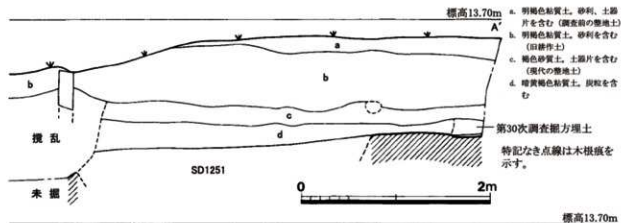
土塁は草刈り後、現況を撮影し平板測量を行った。東辺は57.5m、南辺は11m残り、最も標高が高い南東隅で13.513mを測る。平成16年度に実施した第197次調査の際に比べて、標高13m以上の箇所が減少しており、土塁北端の等高線が広がるなど、ここ数年で積土の流出が著しいことが窺える。また、第197次調査の際と異なり、東隣に共同住宅が建てられた際の盛土で東辺東側は等高線が廻らない。そこで、建物基礎で削平される土塁南辺と土塁東辺の中央部のみ、表土と共同住宅建設時の盛土を剥いだ状態で写真撮影と平板測量を実施した。上面の幅は最大で2.8m、地山からの高さは約0.4mを測



第15図 土塁現況測量図 (1/250)

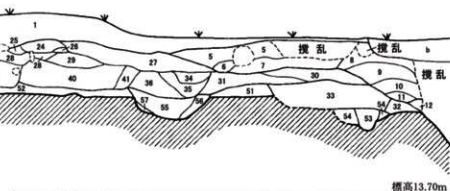


第16図 土塁積土測量図 (1/250)



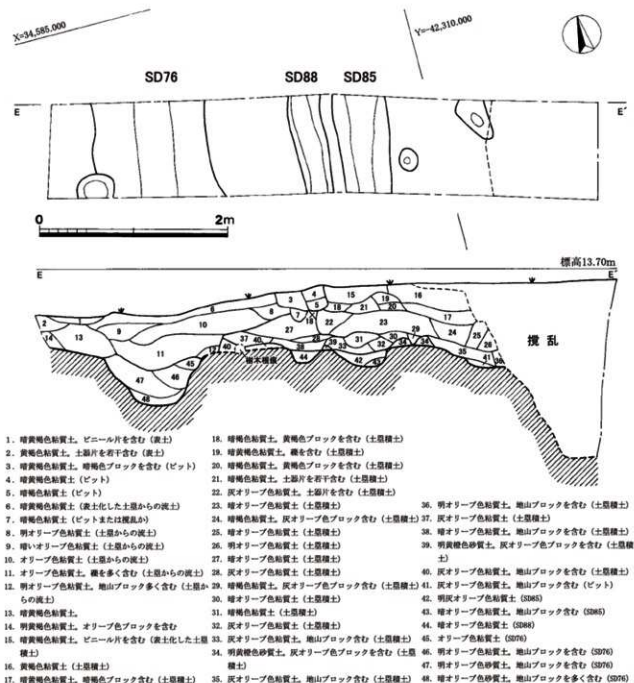
- A. 暗褐色粘質土 (近世以降の表土)
B. 明オリリーブ色粘質土、炭粒、土層片を含む
C. 明オリリーブ色粘質土
D. オリーブ灰色粘質土、明黄褐色ブロックを含む

1. 暗褐色粘質土。ビニール片含む (表土化した層土)
2. 暗褐色粘質土。灰オリリーブ色ブロックを含む (表土化した層土)
3. 灰オリリーブ色粘質土 (表土化した層土)
4. 褐色粘質土。暗褐色ブロックを含む (表土化した層土)
5. 黄褐色粘質土。暗褐色ブロック、土層片を含む (土層からの流土)
6. 暗褐色粘質土。炭土粒を若干含む (土層からの流土)
7. 褐色粘質土 (土層からの流土)
8. 暗褐色粘質土。暗黄褐色ブロックを含む (土層からの流土)
9. 黒褐色粘質土。明オリリーブ色ブロックを含む (土層からの流土)
10. 灰黒褐色粘質土 (土層からの流土)
11. 黒褐色粘質土。明オリリーブ色ブロックを含む (土層からの流土)
12. 灰オリリーブ色粘質土。黄褐色ブロックを含む (土層からの流土)
13. 暗褐色粘質土。暗オリリーブ色ブロックを多く含む (土層からの流土)
14. 暗オリリーブ色粘質土 (近世土坑)
15. 暗オリリーブ色粘質土 (土層からの流土)
16. 暗褐色粘質土 (近世土坑)
17. 暗オリリーブ色粘質土。土層片を含む (近世土坑)



18. 明オリリーブ色粘質土 (近世土坑)
19. 暗オリリーブ色粘質土。黄褐色ブロックを含む (近世土坑)
20. 灰オリリーブ色粘質土。黄褐色ブロックを多く含む (近世土坑)
21. 暗褐色砂質土。明オリリーブ色ブロックを含む (近世土坑)
22. 暗オリリーブ色粘質土 (近世土坑)
23. 明オリリーブ色粘質土 (ピット)
24. 明黄褐色粘質土 (土層様土)
25. 灰褐色粘質土。黒褐色ブロックを含む (土層様土)
26. 暗褐色粘質土。明黄褐色ブロックを含む (土層様土)
27. 明褐色粘質土。暗褐色ブロック、礫を含む (土層様土)
28. 黒褐色粘質土。土層片を含む (土層様土)
29. 暗褐色粘質土。明黄褐色ブロック、土層片を含む (土層様土)
30. 褐色粘質土。炭土粒、土層片を含む (土層様土)
31. 黒褐色粘質土 (土層様土)
32. 暗褐色粘質土。黄褐色ブロックを含む (土層様土)
33. 黒色粘質土。明黄褐色ブロック、土層片を含む (土層様土)
34. 明黄褐色粘質土。黄褐色ブロックを含む (土層様土)
35. 暗褐色粘質土。黄褐色ブロックを多く含む (土層様土)
36. 黒褐色粘質土 (土層様土)
37. 暗褐色粘質土。暗オリリーブ色ブロックを含む (土層様土)
38. 暗褐色粘質土。暗オリリーブ色ブロックを多く含む (土層様土)
39. 黒褐色粘質土。灰オリリーブ色ブロックを含む (土層様土)
40. 黒褐色粘質土。土層片を多く含む (土層様土)
41. 黒褐色粘質土。明黄褐色ブロック、土層片を含む (土層様土)
42. 暗褐色粘質土。土層片を含む (土層様土)
43. 暗オリリーブ色粘質土 (土層様土)
44. 明オリリーブ色粘質土 (土層様土)
45. 暗褐色粘質土。灰オリリーブ色ブロックを含む (SD86)
46. 暗オリリーブ色粘質土。砂利を含む (SD85)
47. 暗褐色粘質土。砂利、土層片を含む (SD86)
48. 黒褐色粘質土。明オリリーブ色ブロックを含む (SD86)
49. 暗黄褐色砂質土。砂利を多く含む (SD85)
50. 明オリリーブ色粘質土。暗褐色ブロックを含む (田表土)
51. 灰オリリーブ色粘質土 (田表土)
52. 灰オリリーブ色粘質土 (田表土)
53. オリーブ灰色粘質土 (ピット)
54. 灰オリリーブ色粘質土。黒褐色ブロックを含む (ピット)
55. 暗褐色粘質土。黄褐色ブロックを多く含む (SD74)
56. 黒褐色粘質土。黄褐色ブロックを含む (SD74)
57. 暗オリリーブ色粘質土 (SD74)

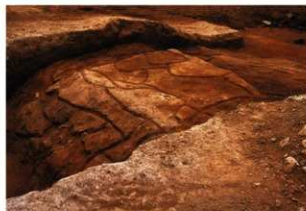
第17図 南区東壁土層実測図 (1/40)



第18図 土層トレンチ遺構配置図・北壁土層実測図（1/40）

る。積土は版築状ではなく、単に積土を盛っただけの簡単なもので、しまりも弱い。

土層東辺中央部には、土層基底部の状況と土層下の遺構を確認するために、東西長6.5m、南北幅1mのトレンチを設けた。土層の観察から、現状の土層は積土の流出でかなり幅広になっている。東辺東側は削平されているが、西側の基底部が残存していた。残存する積土から、本来の基底部の幅は約3mと推測される。表土化した積土を含めると、地山から0.65mの高さで残存していた。地山から0.15～0.2mと0.4mで土層のラインが一直線になっており、複数の段階を経て土盛りをしたと推測される。土層下の地業痕跡はなかったが、南辺では地山と積土の間に7cmの暗オリブ色粘



第19図 土塁東辺中央積土検出状況（東から）



第20図 土塁南辺積土検出状況（北東から）



第21図 南区東壁土層（南西から）



第22図 土塁トレンチ北壁土層（西から）

質土が分布する箇所があるのに対して、東辺では地山上に積土を盛る。地表を削平して、土盛りをする整地があったと思われる。この他、土塁トレンチ底面で溝状遺構3条とピット3基を検出した。

溝状遺構

SD76（第18、22図）

トレンチ西側で検出した溝である。長さ1m以上、幅1.05m、深さ0.5mを測る。埋土はオリーブ色が中心である。下層は砂質気味になる。土層断面の観察から土塁西裾に沿って走り、土塁区画から流れてきた土が堆積した後に、土塁積土が崩れて堆積していく様子が窺える。出土遺物は、土師器の坏や甕、土鍋の口縁部片に加え、黒色土器A類の細片や、須恵器、古瓦の細片がある。

SD85（第18、22図）

トレンチ中央東寄り検出した溝である。長さ1m以上、幅0.6m、深さは最大で0.3mを測る。埋土は、上層が明灰オリーブ色粘質土、下層が暗オリーブ色粘質土で、いずれも地山ブロックを含む。出土遺物は土師器ばかりで、高坏の脚部と見られる破片や、9～10世紀初頭の坏の細片がある。

SD88（第18、22図）

トレンチの中央で検出した。土塁トレンチ検出の溝では最も細く、長さ1m以上、幅0.35m、深さは0.15mに過ぎない。埋土は暗オリーブ色粘質土で、SD85に類似する。遺物は少なく、土師器坏蓋のつまみの他は、土師器の細片が出土したのみである。坏蓋の年代は、8世紀に収まる。

3. 出土遺物 (第23～25図、第1表)

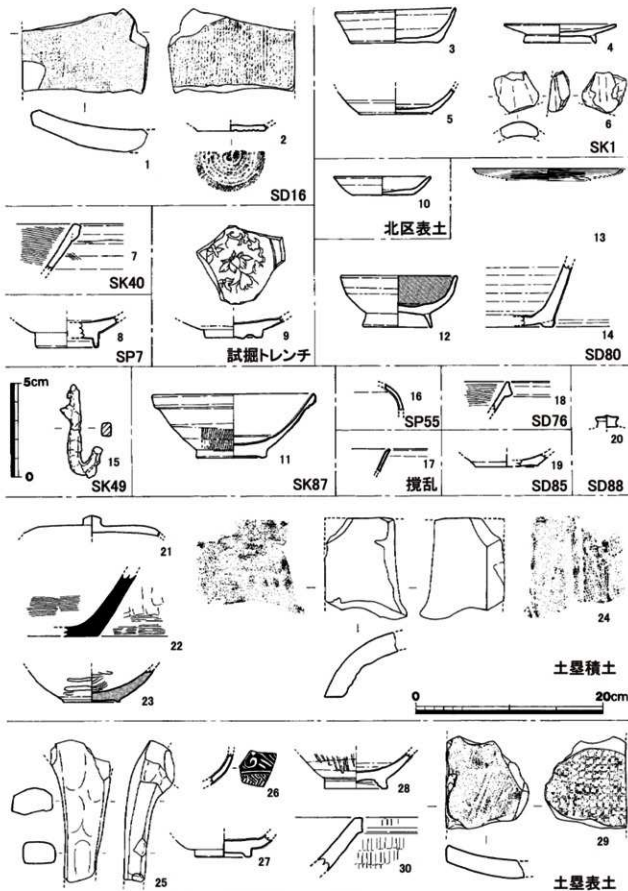
合計で、バンコンテナ6箱分の遺物が出土した。古代の土師器・須恵器・黒色土器・瓦と、中世の輸入陶磁器や土師器・須恵器が大半である。このほか、弥生土器の甕底部や黒曜石の剥片を表採し、土塁掘や表土からは、近世や近代の遺物も出土した。古代の瓦は、ごく一部の正格子タタキ目の瓦を除けば、大半が斜格子タタキ目か縄目タタキ調整を施す。また、ほとんどが平瓦か丸瓦の破片で、軒平・軒丸瓦の破片は出土しなかった。その他、個々の法量や文様などの詳細については、遺物観察表を参照願いたい。なお、中世陶磁器の分類・年代は、大宰府分類(注)に拠った。

(注) 太宰府市教育委員会編 2000年『大宰府条坊跡XV —陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集

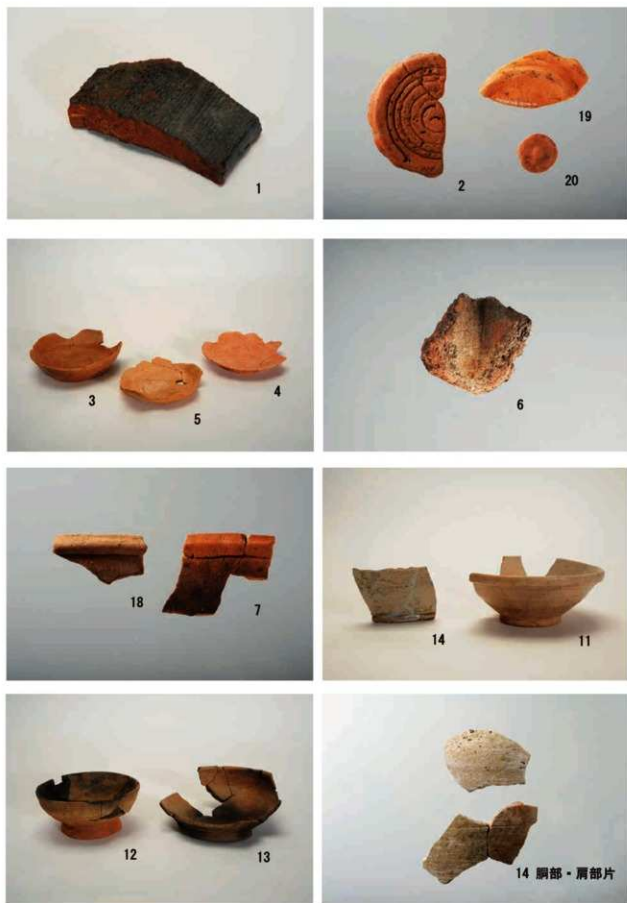
第1表 出土遺物観察表

遺物No	出土遺物	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色相 (地質)	外面 (地質)	内面 (地質)	外面	内面	底面	胎土	年代・備考	登録番号
1	SD16	瓦	平瓦	(8.9)	(13.4)	2.4	灰色			布目	縄目	—	精良		201304 000020
2	SD16	土師器	杯	—	[7.2]	(0.7)	褐色			ヨコナデ	回転ナデ	ヘラ切り	微砂粒 赤色粒子含む	9c前半	201304 000014
3	SK1	土師器	杯	12.8	9.2	3.3~ 3.7	にぶい褐色			ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り 板状圧痕	微砂粒 金箔母・赤色粒子		201304 000001
4	SK1	土師器	托	12.0	7.4	2.0	褐色			摩耗により不明			微砂粒 赤色粒子含む	10c~11c初頭	201304 000008
5	SK1	土師器	杯	—	7.8	(2.8)	褐色			ヨコナデ	ヨコナデ 回転ナデ	糸切り 板状圧痕	微砂粒 赤色粒子含む		201304 000004
6	SK1	土師器	口皿	(4.4)	(4.7)	1.4	灰黄褐色			ケズリ	工具ナデ	—	微砂粒	内面被熱	201304 000007
7	SK40	土師器	土鍋	—	—	(5.0)	褐色~褐色	褐色		ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ	—	微砂粒 金箔母・赤色粒子	玉縁口縁	201304 000029
8	SP7	青磁	碗	—	[6.7]	(3.3)	灰オリーブ色	にぶい褐色		ナデ	蛇の目 輪刺目	ケズリ	精良	I類、甕底葉裏 12c中頃~12c後半	201304 000010
9	試掘 トレンシ	白磁	碗	—	[6.0]	(2.3)	灰白色	灰白色		ナデ 一部磨削	ナデ 磨削	ヘラケズリ	精良	VI類、内面見込みより蓮華文 12世紀前半	201304 000045
10	北区表土	土師器	杯	[10.4]	[6.6]	2.0	褐色			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 板状圧痕	微砂粒 赤色粒子含む		201304 000046
11	SD74	白磁	碗	16.9	7.5	6.8	浅黄褐色	黄褐色		ヘラケズリ 一部磨削	施釉	削出し面台	精良	IV~1a類、玉縁輪 11c後半~12c	201304 000066
12	SD80	黒色土器 大甕	甕	12.1	7.2	5.5	褐色	黒色		ヨコナデ	ヨコナデ	貼付面台	微砂粒 赤色粒子含む	焼成時に一部割らむ 10c~11c初頭	201304 000086
13	SD80	黒色土器 小甕	甕	[16.4]	[8.8]	(5.9)	にぶい黄褐色~黒色			ヨコナデ 後ミガキ	ヨコナデ 後ミガキ	ヘラ切り 板状圧痕	微砂粒 赤色粒子含む	貼付面台 10c後半~11c初頭	201304 000087
14	SD80	灰釉陶器	壺	—	—	(6.7~)	灰黄釉	にぶい 黄褐色		ヨコナデ 施釉	ヨコナデ 施釉	回転ナデ 砂目	微砂粒	割部・屑面片あり	201304 000090
15	SK49	鉄製品	釘(鐵?)	(4.9)	2.3	0.8	赤錆			—	—	—	—	重量: 5.8g	201304 000041
16	SP55	緑釉陶器	壺	—	—	(2.9)	灰オリーブ色	灰色		ヨコナデ 施釉	ヨコナデ 施釉	—	精良	屑面片	201304 000061
17	復元	緑釉陶器	碗?	—	—	(2.4)	緑色	黄灰色		ヨコナデ 施釉	ヨコナデ 施釉	—	精良		201304 000117
18	SD76	土師器	土鍋	—	—	(3.3)	にぶい黄褐色			ヨコナデ	刷毛目	—	微砂粒 金箔母含む	玉縁口縁	201304 000074
19	SD85	土師器	杯	—	[6.6]	(1.3)	褐色			ナデ	磨削により不明		微砂粒 赤色粒子含む		201304 000094
20	SD188	土師器	杯蓋	(2.4)	—	(1.2)	褐色			ナデ	—	—	微砂粒	つまみ部、接合痕あり	201304 000105
21	土器様土	土師器	杯蓋	—	—	(2.3)	褐色			回転ナデ ケズリ	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	8c	201304 000127
22	土器様土	灰黄釉 (中世)	燈鉢	—	—	(6.6)	灰黄色			ケズリ 刷毛目	刷毛目 後ナデ	ケズリ	微砂粒 石灰質含む		201304 000125
23	土器様土	瓦葺	甕	—	[6.0]	(3.5)	にぶい黄褐色 色~灰色	にぶい 黄褐色		ナデ 後ミガキ	ナデ 後ミガキ	貼付面台	微砂粒	12c後半	201304 000154
24	土器様土	瓦	丸瓦	(10.7)	(8.9)	2.1	灰黄色			ナデ	布目	—	微砂粒		201304 000126
25	土器様土	土師器	三足鍋	(15.0)	(6.4)	2.4	褐色			ケズリ 後オサエ	ケズリ 後オサエ	—	砂粒	屑面片、中世	201304 000019
26	土器様土	粉青沙器	碗?	—	—	(3.4)	灰オリーブ色 /黄灰色	灰色/ 灰白色		金箔 施釉	ナデ 施釉	—	精良	16cか	201304 000135
27	土器様土	青磁	碗	—	6.1	(2.5)	灰オリーブ色	灰白色		ヨコナデ 施釉	ヨコナデ 施釉	—	精良	I~1a類、甕底葉裏 12c中頃~12c後半	201304 000239
28	土器様土	青磁	碗	—	6.7	(3.9)	にぶい黄褐色	浅灰色		ヨコナデ 一部磨削	ヨコナデ 一部磨削	蛇の目 輪刺目	微砂粒	皿~2a類、外面に磨削文 四葉文、12c中頃~12c後半	201304 000240
29	土器様土	瓦	平瓦	(9.7)	(8.7)	1.9	黄灰色			不規整 一部磨削	正格子目	—	精良		201304 000221
30	土器様土	石製品	石鍋	—	—	(5.6)	灰色	黄灰色		ケズリ ノミ痕	ケズリ	—	滑石質	外面にスス付着、14c~15c	201304 000238

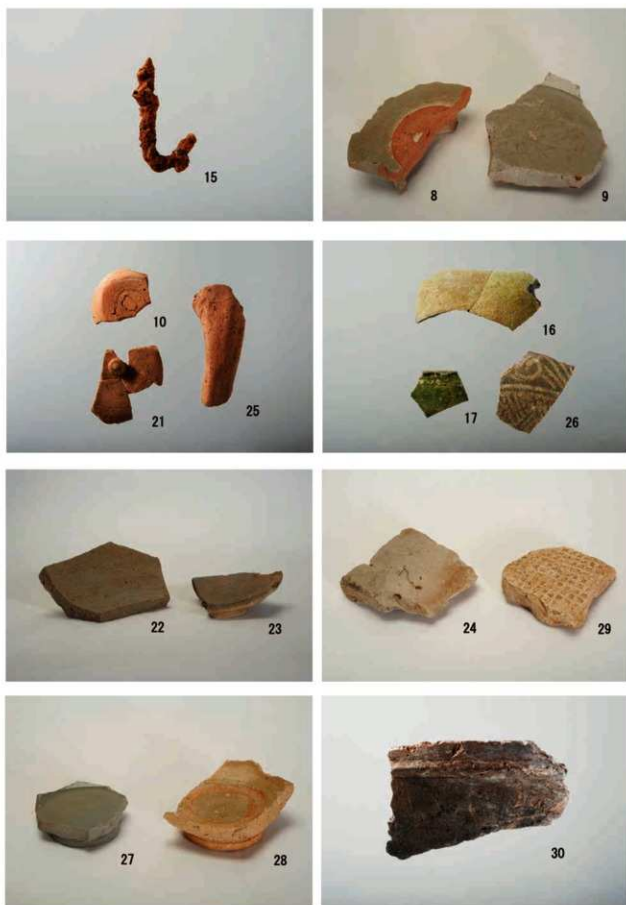
【凡例】〔 〕は復元値を、()は残存値を、—は欠損または該当する部位が無いことを示す。



第23図 出土遺物実測図(羽口・鉄製品は1/2、その他は1/4)



第24図 出土遺物写真1



第25図 出土遺物写真2

IV. 総括

古代の遺構について

今回の調査では、古代の溝状遺構を8条も検出したが、特に注目できるのがSD80とSD16である。SD80からは灰軸陶器が出土し、付近では緑軸陶器も出土している。立石土塁内部は、過去の土取り時に古代の瓦や二列に並ぶ柱穴群が見つかったと言われており(註)、今回の調査でも検出した遺構の大半で古代の瓦が出土したことから、Ⅱ期政庁に付属する官衙群の存在を追認できた。

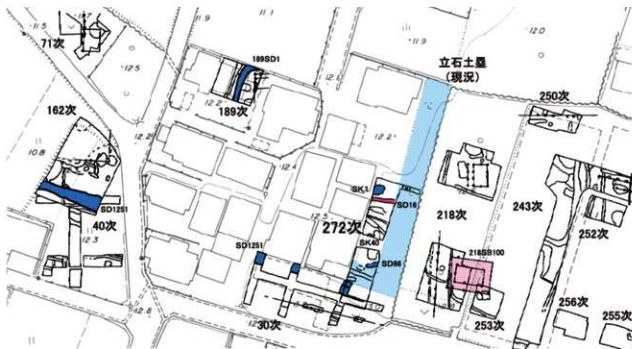
SD16は真北から82°西偏するが、第218次調査で検出された9世紀中頃の四面廂建物SB100の方位(N-8°-E)と一致し、位置関係から218SB100に関連する溝の可能性はある。

土塁について

土塁の構造については先述したので、次に土塁の年代について述べておく。今回、土塁下で検出した遺構で最も年代が新しいのは、11世紀後半～12世紀の白磁玉縁碗が出土したSD74である。土塁積土からの出土遺物では、12世紀後半の瓦器碗が最も新しい。土塁表土からも、12世紀後半の青磁碗が出土した。このことから、土塁の築造年代は12世紀後半以降と推測される。土塁の存続期間だが、13世紀以降の出土遺物として、土塁表土から14～15世紀の石鍋や16世紀代の粉青沙器が出土した。この年代は、外堀であるSD1251が埋没する15世紀後半～16世紀や、土塁内部の第189次調査で検出された、189SD1の廃絶年代である15世紀と重なる。土塁内部の調査事例が少なく、現状での予想になるが、立石土塁は最長で約400年間機能したと思われる。

土塁に付随する遺構として、外堀SD1251に加えてSD76・86を土塁内側裾で検出した。いずれも土塁積土に干渉せず、埋土や出土遺物からも、土塁と同時期に掘削された内溝の可能性が高い。この他、出土遺物の年代からSK1・40、SP7などが土塁と同時期の遺構と思われる。

(註) 松村一良 1983年「筑後国府の調査」 財団法人古代学協会『古代文化』第35巻第7号



第26図 第272次調査周辺の主要遺構配置図 (1/1,000)

報告書抄録

ふりがな	ちくごくふあと ーだい272じはつくつちようさほうこー							
書名	筑後国府跡 ー第272次発掘調査報告ー							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第341集							
編著者名	西 拓巳(編)・丸山裕見子							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2014(平成26)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
ちくごくふあと 筑後国府跡 第272次調査	くろまへ 久留米市 あひかわまち 合川町 386-1 外	40203	030112	33° 18′ 51″	130° 32′ 35″	2013.05.07 2013.07.06	516 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第272次調査	官衛 城館	古代 中世	溝状遺構 13条 土坑 8基 土塁 1基		土師器、須恵器、 輸入陶磁器、古瓦		方形館跡の 土塁を調査。	
要 約								
本調査区は、筑後川左岸の低台地上に位置し、「立石土塁」の通称がある方形館跡の土塁が残る場所である。遺構として、まず古代の溝を検出した。これらの中には施釉陶器が出土した遺構もあり、四面廂建物と並行に走ると予想される溝があることから、付近で発見されているⅡ期政庁関連の官衙群に関連する遺構と思われる。土塁は現況や積土の状況を確認し、出土遺物や土塁下の遺構から、12世紀後半以降に築かれた土塁と予想できる。また、土塁の内側に内溝が並走することを明らかにした。今回出土した遺物や、過去の調査例から、土塁は16世紀頃までの約400年間機能したと思われる。								
土木工事の届出日	平成25年3月8日			遺物の発見通知日			平成25年7月10日 (25文財第453号)	

筑後国府跡

ー第272次発掘調査報告ー

久留米市文化財調査報告書 第341集

平成26年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社

久留米市梅満町972